

序 「春夫文学」の出発期

辻本 雄一

若い気鋭の女史、山中千春氏の『佐藤春夫と大逆事件』が上梓されたことは、まことに慶ばしい。

熊野・新宮という所は、不思議な所である。明治期の大石誠之助の時代から、いろいろな人々が新宮を訪れ、さまざまな「文化」の芽を蒔いて行ってくれる。彼女もまた、そういう人のひとりである。

学生時代から、長時間の夜行バスでやってきて、佐藤春夫記念館等でフルに調査して帰ってゆかれる。本書では、熊野・新宮での地元資料、学校史なども丹念に読み込み、それを濾過するかのように、中央での資料と比較点検する作業が十分に行き届いているのも、何度か新宮に足を運んだ成果であって、頼もしいかぎりである。

山中さんには、二〇一二年に記念館で『愚者の死』発表百年展を企画した時、貴重な資料を大量にコピーして送ってもらい、大いに助けていただいた。

さらに、来日中であったフランス・ボルドー大学のクリスティヌ・レヴィ先生を、僻遠の地・新宮まで案内してくれて、その企画展を紹介してもらった。レヴィ先生が、実は私の弟が中上健次の翻訳をしています、とおっしゃる。中上の作品『奇蹟』のフランス語訳で野間文芸翻

訳賞を受賞したジャック・レヴィさんであった。これも奇な縁で、弟を通して新宮の地に関心があったとおっしゃる。ドレフュス事件を専門とする先生であるだけに、「大逆事件」ももちろん強い関心をお持ちであった。わが国の知識人の「弱さ」みたいなものへの指摘も、鋭いものがあった。

さて、本書は、一言で言えば、春夫の詩「愚者の死」から、好評であった「美しき町」への道程、その間の諸作品、まさに「春夫文学」の出版期の詳細な分析の成果が盛り込まれている。その後景に、「大逆事件」の衝撃による深い翳が揺曳しており、春夫は自己崩壊の危機を抱えながら、そこから「表現」の糧を汲み取っていったという指摘である。

スバル同人の連作である「街上夜曲」での春夫作品を、「抒情詩」に分類、腑分けして読み解く視点は、「傾向詩」と「抒情詩」との狭間を行き来する春夫の姿を浮き彫りにさせ、この作品を単に時間的な経緯からのみ「傾向詩」に分類して済ませてきた私にとっては、目から鱗の感、反省を強いられる。さらに「犬吠岬の旅情」の詩に、「大逆事件」の波紋として喚起された南北朝正閏論争と、その痕跡を読み取る視点なども、興趣をそえられる個所である。

随所に窺える傾向詩群にみる春夫の、「反語性」を超えるものとしての、「巧妙なレトリック」を、春夫の創作方法の根本的な態度とも位置づけている。これまで「傾向詩」と言われるものが、とかく思想、思念の方向からのみ捉えられがちであったことに対して、一石を投じる役割を

はたしているのもたしかだ。それは春夫を、簡単に「詩人」として片づけられない複雑さを炙りだしているとも言えよう。

「日本人ならざる」という、大石誠之助への共感、それは春夫自身の内部にも通ずるという認識は、後の「日本人脱却論の序論」から遡及させて、作品「愚者の死」の解釈に反映させ、「日本人ならざる」という意識が、その時代にあっても、あるいはその時代だからこそ、狭いナショナルリズムの枠を超えて、現代にまでつながる日本人の精神性の問題として摘出して見せてくれている。そうして「日本人ならざる」とする世間の批判の眼を逆手に取って、それだからこそ「日本人ならざる」ことが、普遍性へと繋がる道筋を付けてくれているのだということを強調している、そんな「読み」を可能にしてくれる。

山中さんの春夫研究への出発が、当初専攻した美術研究から入って行かれたと聞き及んでいるが、多くの図版を駆使しての「美しき町」論は、春夫のこの作品にいつそう幅と拡がりとを示唆する「読み」を可能にしてくれている。この作品が、ユートピア志向に連動した夢物語ではなく、「愚者の死」を書いた詩人が、「大逆事件の死刑報道に戦慄した、人間性の奥深くに食い入る底知れない闇の中からしか生まれえない、潔癖なまでの美意識の結晶」とする評価も、春夫がニーチェや森鷗外から受けた影響を踏まえつつ、自己崩壊の危機を乗り越えて、文明批評家として「日本近代」を撃つ、その早熟な歩みとしての評価にもつながってゆこう。

ただひとつ心残りなのは、春夫のほぼ同じ時期を考察していて示唆に富む指摘も多い、『立教大学日本文学』に連載されている石崎等氏の論考に触れられていない点である。時間的に併行して論じられていた関係で、やむを得なかったのだろうが、若い感覚で、石崎論考に対する言及があれば、一層この時期の春夫研究が実り豊かなものになったのにと惜しまれる。

最近、私も少し係わって『佐藤春夫読本』（河野龍也編著・二〇一五年一〇月勉誠出版刊）が刊行され、幸い好評を博していると聞く。山中さんにも、「無名時代の佐藤春夫と大杉栄の周辺」という文章を書いてもらった。

作家の池澤夏樹氏が、この書に触れながら、「作家は死んでも作品は残る。そして評価はまず下がる。これについて、死んだ作家は一度忘却の煉獄に入ると言いかけたがある。復帰する者は少ない。／＼はくは佐藤春夫という人がずいぶん好きなのだが、どうも彼は煉獄から戻って来なかったらしい。（略）「傾向詩」を書いていた反抗的な若者が作品ごとに、あるいは恋の一つ一つを足場に、円熟した人格になっていった、最後は文壇の大御所に至る。少しは疎まれたかもしれない。／＼大事なのは書かれたものであって書いた人ではない。しかし、作家の人生と作品の絡み合いは謎解きを誘うおもしろいミステリなのだ。」（『週刊文春』2月11日号・「私の読書日記」と述べてくれている。

若い研究者諸氏が、春夫文学への関心を高め、多様な「読み」を提供してくれるのはありがたいし、多くの刺戟を与えられるものである。本書と相俟った相乗効果で、「春夫文学」への関心がさらに深まり、高まればとも願う。

本書と同じテーマを課題としてきた私自身にとっては、「先を越された」の念がないわけではないが、それは老いの躁り言と言わべきものと心の中に仕舞いこんで、山中女史のこれからの望み多き研究生生活へのエールとして拙文をお届けし、その船出を祝福したいと思う。

(二〇一六年二月記)

(新宮市立佐藤春夫記念館館長)

佐藤春夫と大逆事件
目次

序 「春夫文学」の出発期 辻本雄一 i

序 「愚者の死」の新解釈 山泉進 ii

第一章 大逆事件の衝撃 1

第一節 「愚者の死」をめぐる諸問題 2

第二節 新宮中学校停学処分と精神的危機——「若き鶯の子」前後の時代状況 10

第三節 精神的危機からの脱却——「若き鶯の子」とニーチェ『ツアラトウストラ』 17

第四節 「愚者の死」に描かれた精神的葛藤——大逆事件と大石誠之助の処刑 24

第五節 「日本人ならざる者」——明治四〇年代の大石誠之助の活動 30

第六節 「愚者の死」の諷刺と大逆事件批判——与謝野寛「誠之助の死」の反語との比較 37

第二章 大逆事件後における佐藤春夫の近代批判 55

第一節 「愚者の死」以後 56

(1) 問題の所在 56

(2) 「傾向詩」と「抒情詩」の関係 57

	(3) 明治期の詩と評論	64
	第二節 大逆事件の余波と教育制度批判	67
	(1) 〈多数者〉の暴力に抗して——佐藤豊太郎宛書簡における教育制度批判	67
	(2) 大逆事件後の社会状況への関心——徳富蘆花「謀叛論」とその波紋	73
	第三節 批評家としての出発	77
	(1) 〈国民〉か〈非国民〉か——「日本人脱却論」の序論における日本人批判	77
	(2) 思想言論統制と森鷗外の闘争——「VITA SEXUALIS」の発禁処分前後	87
	第四節 南北朝正閏論争と「小曲四章」	99
	(1) 南北朝正閏論争と文学者の反応	99
	(2) 新たな孤独と悲哀——「小曲四章」における歴史の脱神話化	107
	第五節 二つの〈殉死〉	120
	(1) 不可視の天皇と〈無根拠な死〉——「清水正次郎を悼む長歌并短歌」	120
	(2) 〈小さな性格悲劇〉の行方——乃木希典の殉死をめぐる佐藤春夫の評価	127
	(3) 明治から大正へ——森鷗外を超越する試み	133
	第三章 〈美しい町〉のユートピア	155
	第一节 〈美しい町〉計画と景観	156

(1) ユートピア譚の否定として 156

(2) 計画が孕む排他性 159

第二節 水辺のユートピア…………… 162

(1) 作品の中に描かれる水辺 162

(2) 「美しき町」に描かれる水辺——「月かげ」と新宮の水辺の記憶 166

(3) 隅田川の水辺——司馬江漢の二枚の銅版画における理想的風景 173

(4) 三囲の図像的系譜 182

(5) 前近代の美的イメージとしての司馬江漢 188

第三節 〈精神〉としてのユートピア…………… 191

(1) 実体のない美的空間 191

(2) ホイッスラーの芸術論との関係 193

(3) 大正八年前後と佐藤春夫の立場 204

第四節 崩壊から再生へ…………… 209

第四章 大逆事件の痕跡、ユートピアの母胎 231

第一節 無名時代の佐藤春夫とその周辺…………… 232

(1) 川崎禎蔵のモデル 232

(2) 大逆事件の後	233
(3) 荒川義英・大杉栄	234
第二節 大石七分の病	240
(1) 大石七分の個性と川崎禎蔵	240
(2) 『民衆の芸術』創刊	246
(3) 『民衆の芸術』の挫折以後	249
第三節 ユートピアの母胎	255
【引用文献】	266
【参考文献】	266
初出一覧	293

あとがき

「佐藤春夫と大逆事件」というテーマについて、漠然と考えはじめたのは、二〇〇六年大学院後期課程二年の夏の終わり頃からであった。修士課程では主に文学研究の方法論を学んでいたが、後期課程になつてから、フィールド・ワークを含めて西洋美術史研究の方法論を学んだため、春夫が絵を描いていたということや、小説の中にたびたび絵画作品が登場することなどから、春夫の活動を文学史と美術史との関連のなかにどのように位置づけることができるか、ということ为主要テーマにしていた。その研究調査の目的で、和歌山県新宮市の佐藤春夫記念館に何度もお世話になり、実際に春夫の絵画作品を見せていただき、撮影もさせていただいた。また、春夫の蔵書（とくに洋書）の閲覧と調査もさせていただいた。そのときはまだ、大逆事件についての意識や関心は薄かった。

記念館で午前中から調査をはじめて、閉館してからに外に出ると、良い具合に日が暮れている。記念館の近くには、陰になった山々を背後にした熊野川が美しく流れ、それを眺めてしばらく川辺を歩いてから町をぶらぶら散歩する。すると、ふと目に入ってくるのは大石誠之助の自宅があったという標識。そこから十分弱歩くと、春夫の実家があった丹鶴城跡。そこからさらに十分くらい歩くと、西村伊作邸。駅の付近にゆくと、大逆事件の碑があり「志を継ぐ」の文字。こ

うして、とくに何も考えずに、夕方に一人で散歩をしていると、いろいろなものが目に入ってくる。そして思ったのは「みんな、大石誠之助の近所に住んでいたのだなあ」という、ごくありふれた感想だった。地元の方々からすれば当たり前のことかもしれないが、近所付き合いの希薄な東京で生まれ育ったからだろうか、不思議と新鮮に感じられた。その後、数回新宮へ調査に通い、その度に町を散歩しているうちに、これほど春夫の近所に住んでいた町の医者である大石誠之助が、紀州・新宮グループの中心人物として大逆事件で拘束され、処刑されたというのは、若かった春夫の中でどのように受け止められたのだろう。しかも、紀州・新宮グループとして拘束された者は六名にも及んでいる。新宮の町は広くはないため、きっと、現代を生きる私の想像をはるかに超えるほどの衝撃が町全体に走っただろう。それは、どのような衝撃だったのだろうか……それから、新宮市立図書館などにもお世話になりながら、大逆事件に関する地元の資料を調査するようになった。また、宿の方や、たまたま話しかけてくれた市民の方々と、些細な会話の中にも時折「高木顕明さん」とか「大逆事件」という言葉が混ざっていることがあり、そうした市民の方々との出会いからも、大逆事件そのものについて学ばなければ佐藤春夫の文学の本質を理解することはできない、と考えるようになった。

その後、東京では、初期社会主義研究会、大逆事件の真実をあきらかにする会に参加させていだき、大逆事件が過去の事件などでは決してなく、現在も生々しく生きているということを目の当たりにして学び、今も学び続けている。その過程で、美術だけではなく、大逆事件との関連

を春夫の活動の原点として位置づけて、本格的に研究テーマとするに至った。

このように振りかえってみると、私事ではあるが、本書の題名である「佐藤春夫と大逆事件」というテーマの発端は、どこかの文献から影響を受けたとか、なにかから示唆を得て取り組んだとか、誰かに勧められたとか、そういうことではなく、新宮という土地に足を運んでゆくうちに自然発生的に芽生えたものだった。その事実が意味するものは、大逆事件という闇が現代にも生き続けていることを、新宮という町そのものと、そこに生きる人々の姿が、訪れる者に自ずから教えてくれて、問題意識の糸口を与えてくれるということなのだと思う。さらに、大逆事件の真実そのもの、そして過去から現在にわたり、その真実に向き合って尽力している人々の姿そのものが、時間の隔たりを超えて、今を生きる者たちに多くの問題を投げ続けているということなのだと思う。土地や事件そのものが持つ問題と、その本質、そして、そこに真摯に向き合って尽力する人々、そうした全てが研究上の〈師〉であったのだと、改めて思う。

佐藤春夫については、第二次大戦中の戦争協力をふくめて、戦中戦後の活動については、今も批判的な見方があることは否めず、実際に、不可解な点がいくつもある。ただ、その活動の原点に大逆事件の衝撃があったということを念頭におき、それがどのような形で戦争協力に結びついているのかという点を含めて、今後も慎重に分析されてゆかねばならないだろう。

さて、本書は二〇一〇年三月に日本大学大学院芸術学研究科に博士論文（芸術学）として提出したものを土台とし、その後に表示した論文加えて、全体を加筆訂正してまとめたものである。また、博士論文の段階では、『田園の憂鬱』から「美しき町」への流れを英文学との関係から考察する章を設けていた。本来ならば、佐藤春夫の代表作といえは『田園の憂鬱』であるのだが、本書では大逆事件の痕跡と表現の問題を浮き彫りにすることに主眼を置いたため、今回は外すことにした（『田園の憂鬱』論については、別の形でまとめたい）。

また、院生時代に、夏目漱石研究者であり元立教大学教授である石崎等氏が日芸の非常勤講師として赴任されて、後期課程の五年間を通じてゼミに参加した。当時、私の拙い発表を毎回聞いていただき、そこで多くのご意見やご教示をいただいたことは、今ここで改めて感謝したい。

そして、野口雨情のご子息であり『沖野岩三郎』（一九八九年、踏靑社）の著者である野口存彌氏とは、春夫の「愚者の死」をめぐる、お会いする度に、「反語じゃない」と穏やかにおっしゃり、長文の書簡もいただいた。私の解釈も「反語」ではないものの、「諷刺・寓意」といったものだと考えているので、いつも意見が割れるのであったが、二〇一五年一月五日にご逝去されたと伺った。野口さんにお会いしたのは、二〇一三年六月九日に浅草で行われた故・堀切利高氏を偲ぶ会が最後となったことが惜しまれる。

本書の刊行にあたり、初期社会主義研究会や大逆事件の真実をあきらかにする会などで大変お世話になり、多くのご教示をいただいている山泉進氏からお力添えをいただき、折に触れて励ま

してくださった。また、辻本雄一氏は院生時代から記念館や新宮で大変お世話になり、多くのご教示をいただいてきた。さらに、日ごろから、お二人には様々な場所での執筆の機会を与えていただいている。そのようなお二人に序文を寄せていただいたことは、身に余る望外の喜びである。そして何より、論創社の森下紀夫氏のご協力と励ましがなければ、本書の刊行の運びには至らなかった。この御三方には、どれほどの御礼と感謝を申し述べても足りない。そして、これまで研究を続けてゆく上で、院生時代から現在にわたり、多くの方々から励まされ、様々な機会を与えていただいている。その一人一人、全ての皆様に、心より御礼申し上げます。

二〇一六年二月二九日

山中千春

【引用文献】

- 荒畑・一九七五…荒畑寒村『寒村自伝』一九七五年、岩波書店
磯田・一九八二…磯田光一「『田園の憂鬱』の周辺―鹿鳴館の系譜（7）」『文学界』一九八二年八月
猪野・一九八二…猪野謙二『明治の作家』一九六六年、岩波書店
内田・二〇〇二…内田隆三「大逆と殉情」『国土論』二〇〇二年、筑摩書房
大浜・一九六七…大浜徹也『乃木希典』一九六七、雄山閣
加藤・一九九〇…加藤百合『大正の夢の設計家 西村伊作と文化学院』一九九〇年、朝日選書
河上・一九五一…河上丈太郎『蘆花事件』『文藝春秋』一九五一年十月
クラーク・一九九二…ティモシー・クラーク著／鬼原敏枝訳「中洲の盛衰―安永・天明期の浮世絵と
戯作文学にみる江戸の岡場所」『国華』一九九二年
佐藤・二〇〇七…佐藤嗣夫「佐藤春夫の大逆事件」『大逆事件の言説空間』二〇〇七年、論創社
島田・一九七五…島田謹二『日本における外国文学』上一九七五年、朝日新聞社
『全集・石川』…『石川啄木全集』第一六卷、一九五四年、岩波書店
『全集・鷗外』…『鷗外全集』一九八九年、岩波書店
『全集・大石』…『大石誠之助全集』全二卷、一九八二年、弘隆社
『全集・大杉』…『大杉栄全集』第十四卷、現代思潮社

『全集・佐藤』…『定本佐藤春夫全集』全三十八卷、臨川書店

『全集・辻』…『辻潤全集』全十卷、一九八二年、五月書房

『全集・蘆花』…『蘆花全集』全二十卷、新潮社

高橋・一九八五・高橋世織「佐藤春夫「美しい町」について―「倒景」としての東京」『媒』

一九八五年八月

竹内・一九九一・竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』一九九一年、講談社

『ツアラトウストラ』…生田長江訳『ツアラトウストラ』一九九一年、新潮社

中上・一九七九・中上健次「物語の系譜」『国文学』一九七九年二月

成瀬・一九九五・成瀬不二雄『司馬江漢 生涯と画業』一九九五年、八坂書房

野口・一九八九・野口存弥「大逆事件その後Ⅲ」『沖野岩三郎』一九八九年、踏靑社

野田・一九五一・野田宇太郎『日本耽美派の誕生』一九五一年、河出書房

信時・一九九九・信時哲郎「佐藤春夫「美しい町」論―「かはたれ」の物語」『神戸山手短期大学環

境文化研究紀要』一九九九年

西尾・二〇〇二・西尾幹二『ニーチェ』第Ⅰ部、二〇〇二年、筑摩書房

西田・一九七九・西田勝「民衆の芸術」の位置」『大正労働文学研究』一九七九年、十月

西村・一九六〇・西村伊作『我に益あり』一九六〇年、紀元社

芳賀・一九六八・芳賀徹「画人司馬江漢」『自由』一九六八年六月

村井・二〇〇八… 村井則夫『ニーチェ―ツァラトゥストラの謎』二〇〇八年、中公新書
森長・一九七七… 森長英三郎『禄亭大石誠之助』一九七七年、岩波書店
吉田・一九五三… 吉田精一『現代文豪名作全集18 佐藤春夫集』一九五三年、河出書房

略号に続く数字は、基本的に刊行・掲載・発表年、頁数とする。

全集は、煩雑さを避けるため、刊行年を省略し、略号の後に巻数のみを示す。

【参考文献】

第一章

佐藤春夫の傾向詩

中村光夫『佐藤春夫論』一九六二年 文芸春秋社

大岡信『佐藤春夫と堀口大學』（『日本の近代詩』

一九六七年 読売新聞社）

森長英三郎『禄亭大石誠之助』一九七七年 岩波

書店

野口存弥『沖野岩三郎』一九八九年 踏書社

中上健次『物語の系譜』（『国文学』一九七九年二月）

内田隆三『大逆と殉情』（『国土論』二〇〇二年

筑摩書房）

佐藤嗣夫『佐藤春夫の大逆事件』（『大逆事件の言

説空間』二〇〇七年 論創社）

磯田光一『「田園の憂鬱」の周辺―鹿鳴館の系譜

（7）』（一九八二年八月 『文学界』）

平凡社『国民百科事典』4（一九七七年二月二五

日初版第1刷発行）所収

『新高八十年史』『明治大正編』（一九八三年、和歌山県立新宮高等学校同窓会）

生田長江『紀州旅行日記』（『文学者の日記』5 長

与善郎・生田長江・生田春月』一九九九年 博

文館）

辻本雄一『「愚者の死」をめぐる 佐藤春夫と

〈大逆事件〉序説』（一九八四年十月、『近代文学研究』一〇二―一〇三頁）

ニーチエ、生田長江関連

生田長江『ツアラトゥストラ』一九一一年、新潮社

『登張竹風／生田長江』二〇〇六年 新学社近代浪漫派文庫

『ニーチエ』第一、二部 西尾幹二著 二〇〇一年 ちくま文芸文庫

『ニーチエ』ジル・ドゥルーズ著／湯浅博雄訳

二〇〇四年 ちくま文芸文庫

『悲劇の誕生』ニーチエ著／西尾幹二訳 二〇〇四年 中公クラシックス

『ツァラトゥストラはこう言った』上下巻 ニー

チェ著／氷上英廣訳 二〇〇三年 岩波文庫

生田長江訳『ツァラトゥストラかく語りき』

二〇〇八年 書肆心水

グロイター社『ニーチェ全集』(Friedrich

Nietzsche, *Werke, Kritische Studienausgabe*,

hrsg. von G. Colli, M. Montinari, Walter de

Gruyter, 1967-77.) ヘルリン・ニュヨーク

生田長江訳『ニーチェ全集』全12巻 一九三五年

日本評論社

『ニーチェ全集』全16巻＋別巻1巻、一九六三—

八〇年、理想社(後、一九九四年、ちくま学芸

文庫)

村井則夫『ニーチェ—ツァラトゥストラの謎』

二〇〇八年 中公新書

ジャン・グラニエ著／須藤訓任訳『ニーチェ』

一九九五年 白水社 (Jean Granier, *Nietzsche*

Que sais-je? N° 2042, Presses Universitaires de

France, 1982.)

K・レーヴィット著／柴田治三郎訳『ニーチェの

哲学』一九六〇年 岩波現代叢書 (Karl Löwith,

Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr

des Gleichen, neue Ausgabe, Kohlhammer

Stuttgart, 1956.)

藤田健治『ニーチェその思想と実存の解明』

一九七〇年 中公新書

マルティン・ハイデッガー著／細谷貞雄監訳／杉

田泰一・輪田稔訳『ニーチェⅡ』一九九七年

平凡社 (Martin Heidegger, *Nietzsche*, 2Bde.,

Neske 1961.)

ジル・ドゥルーズ著／江川隆男訳『ニーチェと哲

学』二〇〇八年 河出書房 (Gilles Deleuze,

Nietzsche et la philosophie, PUF, 1962.)

明治文学関連

『近代文学回想文集』日本近代文学体系 60

一九七三年 角川書店

木村毅著『明治文学展望』一九二七年六月 改造

社

『近代文学史の構想』『三好行雄著作集』第六卷

一九九三年六月 筑摩書房

中村光夫『明治文学史』一九六三年八月 筑摩叢書

奥野健男『日本文学史 近代から現代へ』

一九七〇年 中公新書

瀬沼茂樹『近代日本文学のなりたち』昭和二六年

河出書房

猪野謙二『明治の作家』昭和四一 岩波書店

新宮市史、大石誠之助関連

『紀伊東牟婁郡誌』一九一七年 東牟婁郡

『新宮史誌』一九三八年 新宮市

『新宮市史』上下巻 一九八三年 新宮市

『大石誠之助全集』全三巻 一九八二年 弘隆社

西村伊作『我に益あり』一九六〇年 紀元社

『熊野誌』第六号、大石誠之助特集号 一九六一年

七月 新宮市立図書館

山口功二「明治後期における地方言論文の役割―

大石誠之助とその周辺」、一九六八年三月『新聞

学評論』

絲屋寿雄『大石誠之助―大逆事件の犠牲者』

一九七一年 濤書房

浜畑栄造『大石誠之助小伝』一九七二年 成江書

店・宮井書店、共同刊行

森長英三郎『禄亭大石誠之助』一九七七年 岩波

書店

沖野岩三郎『沖野岩三郎自伝』一九八三年 沖野

岩三郎先生顕彰事業実行委員会

沖野岩三郎『生を賭して』一九一九年

Joseph Cronin, *The Life of Shinosuke Dr. Oishi and the High Treason Incident*, Wight Tiger Press 2007. (ジョセフ・クローニン「誠之助の生涯 ドクトル大石と大逆事件」)

日本社会主義運動史、大逆事件

石川三四郎『日本社会主義史』、『明治文化全集・

社会編』一九〇七年 日本評論社

吉川守圀『叛逆星霜史 日本社会主義運動側面史』

一九三六年 青木文庫

神崎清編『大逆事件記録』全二巻（第二巻のみ上

下巻)一九五〇年 世界文庫

赤松克麿『日本社会運動史』一九五二年 岩波書店

堺利彦『日本社会主義運動史』一九五四年

三宅雪嶺『同時代史』全六卷 一九五四年 岩波書店

石川三四郎『自叙伝』上下巻 一九五六年 理論社

『社会主義者沿革』上中下巻 一九五六年 近代日本史料研究会

塩田庄兵衛・渡辺順三『秘録大逆事件』上下巻 一九五九年 春秋社

絲屋寿雄『大逆事件』一九六〇年 三一新書
山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』一九六一年

岩波書店
荒畑寒村『寒村自伝』一九六五年 筑摩書房

神崎清『革命伝説』全五巻 一九六九年 芳賀書店

絲屋寿雄『日本社会主義の黎明』一九七二年 日本新書

荒畑寒村『平民社時代』一九七三年 中央公論社

飯田鼎『大逆事件における『近代』と『前近代』——浜畑栄造『大石誠之助小伝』によせて』

一九七三年五月 『三田学会雑誌』六十六巻五号
伊藤整『日本文壇史』一九七九年 講談社

森山重雄『大逆事件——文学作家論』一九八〇年 三一書房

平出修研究会『平出修とその時代』一九八五年 教育出版センター

吉田東伍『倒叙日本史』全十巻 一九一三年 早稲田大学出版部

梅棹忠夫『文明の生態史観序説』一九五九年 中央公論

遠山茂樹『明治維新と現代』一九六八年 岩波新書

遠山茂樹『明治維新と現代』一九六八 岩波新書

前田愛『幻景の明治』一九七八年 朝日選書
鹿野政直『近代日本思想案内』一九九九年 岩波

文庫

鈴木正行『近代の天皇』一九九三年 吉川弘文館

笠原英彦『明治天皇 苦悩する「理想的君主」』

二〇〇六年 中公新書

橋川文三編著『日本の百年 4 明治の栄光』

二〇〇七年 ちくま学芸文庫

橋川文三『橋川文三著作集3』二〇〇〇年 筑摩

書房

野村正男『自由人の眼』一九七〇年 一粒社

石井柏亭『柏亭自伝』一九七一年 中央公論美術

出版

石川松太郎『日本教育史』一九八七年 玉川大学

出版部

山住正己『日本教育小史―近・現代』一九八七年

岩波新書

第二章

参考図書

『日本文学大事典2』全八巻 一九五〇年 新潮社

『日本近現代史辞典』一九九四年 東洋経済新聞

『岩波哲学・思想事典』二〇〇三年 岩波書店

近代史・明治天皇関連

吉田東伍『倒叙日本史』全十巻 一九一三年 早

稲田大学出版部

梅棹忠夫『文明の生態史観序説』一九五九年 中

央公論

遠山茂樹『明治維新と現代』一九六八年 岩波新

書

ANDERSON, Benedict. *Imagined Communities:*

Reflection on the Origin and Spread of

Nationalism, VERSO, 1983. (邦訳は、ベネディ

クト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『定

本想像の共同体』二〇〇七年 書籍工房早山)

石川松太郎『日本教育史』一九八七年 玉川大学

出版部

山住正己『日本教育小史―近・現代』一九八七年

岩波新書

丸谷才一『楠木正成と近代史』『鳥の歌』一九八七

年 福武書店

安丸良夫『近代天皇像の形成』一九九二年 岩波

書店

鈴木正行『近代の天皇』一九九三年 吉川弘文館

西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家
形成と文化変容』一九九五年 新曜社

村井紀『民族・国家・エスニシティ』一九九六年
岩波書店

竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』

一九九七年 日本放送出版協会

鹿野政直『近代日本思想案内』一九九九年 岩波
文庫

橋川文三『橋川文三著作集3』二〇〇〇年 筑摩
書房

原武史『可視化された帝国―近代日本の行幸啓』

二〇〇一年 みすず書房

姜尚中『ナショナリズム』二〇〇一年 岩波書店

飛鳥井雅道『明治大帝』二〇〇二年 講談社学術
文庫

文庫

内田隆三『国土論』二〇〇二年 筑摩書房

笠原英彦『明治天皇 苦悩する「理想的君主」』

二〇〇六年 中公新書

橋川文三編著『日本の百年4 明治の栄光』

二〇〇七年 ちくま学芸文庫

磯川全次『先住民と差別 喜田貞吉歴史民俗学傑
作選』二〇〇八年 河出書房新社

徳富蘆花

河上丈太郎『蘆花事件』『文藝春秋』一九五一年十
月

野田宇太郎『幸徳事件に関する徳富蘆花と池辺三

山の往復書簡（明四四・一）（『明治大正文学研
究』〈特集・徳富蘆花研究〉一九五七年十月 東
京堂

東京堂

東京都近代文学博物館開館披露「生誕百年記念

徳富蘆花展」図録 一九六七年

明治文学全集42『徳富蘆花集』一九六六年 筑摩
書房

書房

関口安義『「謀叛論」と芥川龍之介』『日本文学』

一九九一年

関口安義『万華鏡 蘆花「謀叛論」の衝撃―「成

瀬日記」「井川日記」の出現をふまえて―』『近

代文学研究』一九九七年

吉田正信編『徳富蘆花作品集 梅一輪 湘南雑筆

（抄）』二〇〇八年 講談社文芸文庫

ニーチェ

① ニーチェ NIETZSCHE, Friedrich の原典と邦訳

生田長江訳『ツァラトゥストラ』一九一一年 新潮社

潮社

生田長江訳『ニーチェ全集』全十二巻 一九三五年 日本評論社

年 日本評論社

Also sprach Zarathustra, Reclam, 1944.

『ニーチェ全集』全十六巻＋別巻一卷 一九六三—

八十年 理想社（後、一九九四年、ちくま学芸

文庫）

Nietzsche Werke : kritische Gesamtausgabe, G.Coll.

M.Montinari, Walter de Gruyter, 1967-77.

『ニーチェ全集』全二十四巻 一九七八—八七年

白水社

西尾幹二訳『悲劇の誕生』二〇〇四年 中公クラ

シックス

生田長江訳『ツァラトゥストラかく語りき』

二〇〇八年 書肆心水

② 研究書

藤田健治『ニーチェその思想と実存の解明』

一九七〇年 中公新書

高松敏男・西尾幹二『日本人のニーチェ研究譜』

（『ニーチェ全集』別巻）一九八二年 白水社

西尾幹二『ニーチェ』全二巻 二〇〇一年 ちく

ま文芸文庫

渡邊二郎『ニヒリズム』『ニーチェのニヒリズム』

二〇〇二年 東京大学出版会

『登張竹風／生田長江』二〇〇六年 新学社近代浪

漫派文庫

村井則夫『ニーチェ—ツァラトゥストラの謎』

二〇〇八年 中公新書

森鷗外・思想言論統制

『森鷗外全集第二巻』一九五九年 筑摩書房

稲垣達郎『森鷗外』『近代文学鑑賞講座』第四巻

一九六〇年一月 角川書店

三島憲一『鷗外と貴族的急進主義者としてのニー

チェ』『ドイツ文学』一九六八年十月

水上英広『鷗外とニーチェが近づいた』『比較文学

研究』一九七一年一月

長谷川泉『鷗外文学の位相』一九七四年 明治書院

長谷川泉『鷗外文学の機構』一九七九年 明治書院

竹盛天雄「鷗外その紋様―10―」『ファスチエス』から「沈黙の塔」へ―言論圧迫への諷刺と提言―

『国文学 解釈と教材の研究』一九八〇年二月

宮武外骨「筆禍史」『宮武外骨著作集 第四卷』

一九八五年 河出書房

小堀桂一郎「森鷗外と山縣有朋（上）」『日本及日本人』一九八七年十月

本人

小堀桂一郎「森鷗外と山縣有朋（中）」『日本及日本人』一九八八年一月

本人

小堀桂一郎「森鷗外と山縣有朋（下）」『日本及日本人』一九八八年四月

本人

中村文雄「森鷗外と明治国家」一九九二年 三一書房

横本敦史「『舞姫』と言論統制」『国語と国文学』

一九九四年六月 東京大学国語国文学会

渡辺善雄「『沈黙の塔』・その背景と鷗外の意図」

『森鷗外研究』第六号 一九九五年八月

大塚美保「鷗外旧蔵『獄中消息』（大逆事件被告獄中書簡写し）をめぐって」『鷗外』二〇〇八年七月

月

山崎一穎「鷗外ゆかりの人々」二〇〇九年 おうふう

ふう

その他

三鹽熊太「正閏論問題の起源と大日本国体擁護団」

『日本及日本人』一九一一年

向坂逸郎「嵐のなかの百年」一九五四年 勁草書房

房

瀧川政次郎「誰も知らない幸徳事件の裏面」『特集 人物往来』一九五六年十二月

人物往来

大浜徹也『乃木希典』一九六七年 雄山閣

林尚男「冬の時代の文学―秋水から『種蒔く人』へ―」一九八二年 有精堂

村上重良「正文訓読 近代詔勅集」一九八三年

村上新人物往来社

新人物往来社

平岡敏夫「日露戦後文学の研究」上・下

一九八五年 文巧社

石川松太郎『日本教育史』一九八七年 玉川大学
出版部

渡邊二郎『歴史の哲学一九九九年』講談社学術
文庫

吉川弘文館編集部『近代史必携』二〇〇七年 吉
川弘文館

礪川全次「喜田貞吉と「先住民史観」」『先住民と
差別 喜田貞吉歴史民俗学傑作選』二〇〇八年
河出書房新社

第三、四章

参考図書

①文学・歴史・思想・地名

『日本文学大事典2』全八巻 一九五〇年 新潮社
石川一郎ほか編『江戸文学地名辞典』一九七三年
東京堂出版

WIENER, Philip P. (ed.) *Dictionary of The
History of Ideas*, 4vol., Charles Scribner's Sons,
1973. (邦訳、フィリップ・P. ウィーナー、荒川
義男ほか編『西洋思想大事典』全四巻

一九九〇年 平凡社)

『国史大辞典』全十七巻 一九七九年 吉川弘文館
菊地英夫『江戸東京地名事典』一九八一年 雪華
社

西山松之助『江戸学事典』一九八四年 弘文堂
『日本大百科全書』全二十五巻 一九八四年 小学
館

北村一夫『江戸芸能・落語地名辞典』一九八五年
六興出版

『日本近現代史辞典』一九九四年 東洋経済新聞
『日本歴史大事典』全四巻 二〇〇〇年 小学館
『岩波哲学・思想事典』二〇〇三年 岩波書店
『日本歴史地名大系』全五十巻 二〇〇二年 平凡
社

②美術

OSBORNE, Harold (ed.), *The Oxford Companion to
Art*, Oxford University Press, 1970. (邦訳、佐々
木英也(監)『オックスフォード西洋美術事典』
一九八九年 講談社)。

MYERS, Bernards (ed.) *Encyclopedia of World*

Art. 17vol. McGraw-Hill. (1958) 1959-1983.

TURNER, Jane (ed.) *The Dictionary of Art*,

34vol. GROVE, 1996.

出版

④年表

齊藤月岑『武江年表』(一九八〇年『江戸叢書』第

十二卷、日本図書センター) 一八七八年

大正デモクラシー

信夫清三郎『大正政治史』全四卷 一九五二年

河出書房

松尾尊兌『大正デモクラシーの研究』一九六六年

青木書店

松尾尊兌『大正デモクラシー』一九七四年 岩波

書店

信夫清三郎『大正デモクラシー史』一九七八年

日本評論社

太田雅夫『大正デモクラシー研究』一九九〇年

新泉社

『吉野作造選集』全十六卷 一九九七年 岩波書店

中洲・三囲

『新撰東京名所図会』(臨時増刊『風俗画報』第

二六六号日本橋区之部卷之四) 一八九二年三月

③浮世絵

朝岡興禎『古画備考』全四卷 一九〇三—〇五年

弘文館

市古夏雄・鈴木健一『江戸名所図会Ⅰ』一九九六

年 筑摩書房

市古夏雄・鈴木健一『江戸名所図会事典』

一九九七年 筑摩書房

市古夏雄・鈴木健一『江戸切絵図集』一九九七年

筑摩書房

吉田暎二『浮世絵事典《定本》、全三卷

(一九六五) 一九七四 画文堂(初版、緑園書

房)

山口桂三郎『原色 浮世絵大百科事典 第九卷』

一九八一年 大修館

吉田漱『浮世絵の基礎知識』一九八七年 雄山閣

クラーク（ティモシー）・鬼原俊枝訳「中洲の盛衰

—安永・天明期の浮世絵と戯作文学にみる江戸

の岡場所」『国華』一九九二年二月

近藤義休『新編江戸志』一九一七年 珍書刊行会

『江戸叢書』全十二巻 一九一七年 江戸叢書刊行

会

達磨屋活東子編『新燕石十種』全五巻 一九二五

年 国書刊行会

石井義男編『第十二地区土地区画整理完成記念会』

一九二七年 東京印刷

『大東京繁昌記 下町篇』一九二八年 東京日日新

聞社

『中央区史』全三巻 一九五八年 東京都中央区役

所

安藤菊二篇『中央区町誌』一九八〇年 東京都中

央区役所？

『中洲築立百周年記念』一九八六年 日本橋中洲町

会

朝倉治彦・槌田満文『明治東京名所図会』全二巻

一九九二年 東京堂出版

『中央区沿革図集「日本橋篇」』一九九五年 東京

都中央区立京橋図書館

矢羽勝幸『三囲の石碑』三囲神社宮司（永峯光一）

二〇〇一年

司馬江漢

『洋画の先覚者—司馬江漢展』一九八三年三月 大

阪美術商協同組合

『銅版画の先駆者司馬江漢展』一九八四年十月 浮

世絵太田記念美術館

成瀬不二雄編『司馬江漢全集』全四巻 一九九二

—一九九四年 八坂書房

成瀬不二雄『司馬江漢 生涯と画業』一九九五年

八坂書房

『司馬江漢百科事展』一九九六年八月 神戸市立

博物館／町田市立国際版画美術館

展覧会

東京文化財研究所編『明治期美術展覧会出品目録』

一九九四年 中央公論美術出版

東京文化財研究所編『近代日本アート・カタログ・

コレクション』全八十二巻 二〇〇一—

二〇〇四年 ゆまに書房

東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』

二〇〇二年 中央公論美術出版

東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』

二〇〇五年 中央公論美術出版

浮世絵・近代美術

山口桂三郎『浮世絵大系11 広重』一九七四年

集英社

鈴木重三・北原進、『名品揃物浮世絵』一九九一年

ぎょうせい

辻惟雄（他）『原色日本の美術 第十八巻』

一九九四年 小学館

小林忠『江戸絵画史論』一九八三年 瑠璃書房

小林忠・大久保純一『浮世絵の鑑賞基礎知識』

一九九六年 至文堂

（編）白石つとむ『江戸切絵図と東京名所絵』

一九九三年 小学館

柏亭全集刊行会『石井柏亭の人と芸術』一九五九

年 平凡社

高田瑞穂『近代耽美派』一九六七年 埴書房

宮城達郎『耽美派研究論考』一九七六年 桜楓社

小崎軍司『山本鼎評伝』一九七九年 信濃路

吉田精一『耽美派作家論』一九八一年 桜楓社

高階秀爾『日本近代の美意識』一九七八年 青土

社

芳賀徹『絵画の領分』一九九〇年 朝日新聞社

中村義一『日本近代美術論争史』一九八一年 求

龍堂

中村儀一『続日本近代美術論争史』一九八二年

求龍堂

高階秀爾『日本美術を見る眼』一九九一年 岩波

書店

明治美術学会編『日本近代美術と西洋』一九九二

年 中央公論美術出版

その他

WHISTLER, James McNeill, *Ten o'clock*, London,

The Riverside Press Cambridge, 1888.

WHISTLER, James McNeill, *The Gentle Art of*

Making Enemies, William H. Inge, 1892.

MORRIS, William, *The Collected Works of William*

Morris, 20 vol. Longmans Green Company, 1910-1915.

野田宇太郎『日本耽美派の誕生』一九五一年 河出書房

『芥川龍之介全集』全二四巻 一九九八年 岩波書店

シュティルナー(マックス) 片岡啓治訳『唯一者とその所有』全二巻 一九六八年 現代思潮社

大沢正道『大杉栄研究』一九七一年 政法大学出版局

石井柏亭『柏亭自伝』一九七一年 中央公論美術出版

西田勝『民衆の芸術』の位置』『大正労働文学研究』一九七九年

SPENCER, Robin, *The Painting of James McNeill Whistler*, Yale University Press, 1980.

石田アヤ「大石七分と玉置徐歩」『熊野誌』一九八一年十一月

芳賀徹『平賀源内』一九八一年 朝日新聞社
『辻潤全集』全十巻 一九八二年 五月書房

関川左木夫、コーリン・フランクリン『ケルムスコッド・プレス図録』一九八二年 雄松堂書店
近藤富枝『本郷菊富士ホテル』一九八三年 中公文庫

LOCHNAN, Katharine, *The etching of James McNeill Whistler*, Yale University Press, 1984.

CURRY, David Park, *James McNeill Whistler at the Freer Gallery of Art*, Smithsonian Institution, 1984.

紅野敏郎『文学史の園 一九一〇年代』一九八四年 青英舎

大沢正道『個人主義 シュティルナーの思想と生涯』一九八三年 青土社

小野二郎著作集Ⅰ『ウィリアム・モリス研究』一九八六年 晶文社

小松隆二『大正自由人物語』一九八八年 岩波書店

野口存弥『沖野岩三郎』一九八九年 踏靑社

加藤百合『大正の夢の設計家―西村伊作と文化学院』一九九〇年 朝日選書

『もうひとりの芥川龍之介―生誕百年記念展―』

一九九二年 産経新聞社

中島国彦『近代文学にみる感受性』一九九四年

筑摩書房

DORMENT, Richard, MACDONALD, Margaret,

James McNeill Whistler, Tate Gallery

Publications, 1995.

MACDONALD, Margaret, *James McNeill Whistler*

Drawings, Pastels, and Watercolours, Yale

University Press, 1995.

久保田淳『隅田川の文学』一九九六年 岩波新書

松村達雄訳『ユートピアだより』一九九九年 岩

波書店

MACDONALD, Margaret, *Palaces in the Night*

Whistler in Venice, Lund Humphries, 2001.

田中修司『西村伊作の楽しき住家』二〇〇一年

はる書房

今橋映子『異都憧憬 日本人のパリ』二〇〇一年

平凡社

『西村伊作の世界』二〇〇二年 NHKきんきメ

ディアブラン

小熊佐智子「日本におけるウィスラーの受容―明

治期から大正期まで―」『藝叢』二〇〇二年

川本三郎『川―隅田川―』復刻版（一九五〇）

二〇〇七年 岩波写真文庫

小倉孝誠『パリとセーヌ川 橋と水辺の物語』

二〇〇八年 中公新書

『日本キリスト教歴史大事典』一九八八年 教文館

『新カトリック大事典』全五巻 一九九六―

二〇〇九年 研究社

『岩波哲学・思想事典』二〇〇三年 岩波書店

佐波亘編『植村正久と其の時代』全五巻

一九三七年 教文館

佐波亘、別冊『植村正久夫人季野がことごと』教

文館 一九四三年

塩田庄兵衛・渡辺順三『秘録大逆事件』上下巻

一九五九年 春秋社

西村伊作『我に益あり』一九六〇年 紀元社

神崎清『革命伝説』全五巻 一九六九年 芳賀書

店

J・B・ヘール『日本伝道二十五年』一九七八年

大阪女学院

『大石誠之助全集』全三巻 一九八二年 弘隆社

『新宮市史』上下巻 一九八三年 新宮市

水垣清『日本プロテスタント抄史』、日本キリスト

改革派中津川教会内家長会 一九八五年

野口存弥「大逆事件その後Ⅲ」『沖野岩三郎』

一九八九年 踏靑社

佐藤春夫関連

テキスト（全集）

筑摩書房版『現代日本文学全集』「佐藤春夫集」

一九五四年

河出書房版『自選佐藤春夫全集』第五巻

一九五七年

新潮社版『日本文学全集25』「佐藤春夫集」

一九六一年

講談社版『日本現代文学全集59』「佐藤春夫集」

一九六四年

講談社版『佐藤春夫全集』第六巻 一九六七年

筑摩書房版『現代日本文学大系』「佐藤春夫集」

一九六九年

河出書房版『日本文学全集19』「佐藤春夫」

一九七〇年

国書刊行会『日本幻想文学集成』「佐藤春夫」

一九九二年

臨川書店版『定本佐藤春夫全集』全三八巻

一九九八年

作家論・作家研究

生田長江「佐藤春夫の『田園の憂鬱』」『中外』

一九一八年十月

広津和郎「新人佐藤春夫氏」『雄弁』 一九一八年

一月

江口渙「佐藤春夫氏」『雄弁』 一九一九年一月

赤木桁平「佐藤春夫論」『文章世界』 一九一九年

四月

柳沢健「佐藤春夫論」『新潮』 一九一九年五月

藤森成吉「所謂田園の文学」『早稲田文学』

一九二〇年三月

堀江朔「佐藤春夫君の芸術」『早稲田文学』

一九二二年十月

今東光「佐藤春夫論」『新潮』一九二三年三月

大木雄三「春夫・浩二と並べて」『局外』

一九二三年五月

小林秀雄「佐藤春夫のジレンマ」『文芸春秋』

一九二六年二月

藤森淳三ほか「佐藤春夫論」(合評会)『不同調』

一九二六年一二月

保田與重郎「佐藤春夫」一九四〇年 弘文堂

堀口大学『詩と詩人』一九四八年 講談社

中村光夫「佐藤春夫論」一九六二年 文芸春秋新

社

江口渙『わが文学半生記』一九五四年 青木書店

谷沢栄一『大正期の文芸評論』一九六二年 塙書

房

大岡信『日本の近代詩』一九六七年 読売新聞社

井村君江『大正文学の比較文学的研究』一九六八

年 明治書院

丸岡明『近代日本の文豪3』一九六八年 読売新

聞社

半田美永『佐藤春夫研究』二〇〇〇年 双文社

遠藤郁子『佐藤春夫作品研究』二〇〇四年 専修

大学出版局

明治期の詩歌関連

山本健吉「解説」『佐藤春夫全集』第二巻、講談社

一九六六年

辻本雄一「『愚者の死』をめぐって」佐藤春夫と

〈大逆事件〉序説―、『近代文学研究』一九八四

年十月

紅野敏郎「『南紀芸術』―春夫・潤一郎・加藤一夫・

竹内勝太郎・阪中正夫・沖野岩三郎ら」、『解釈

と教材』一九九三年三月

辻本雄一「近代作家と熊野―中上健次／『大逆事

件』／佐藤春夫／沖野岩三郎／それぞれの発信」、『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年十月

二〇〇三年一二月、山崎泰「佐藤春夫と大逆事

件」、『熊野誌』第四十九号

辻本雄一「佐藤春夫における短編『砧』の問題―

熊野および春夫父子の『大塩事件』と『大逆事

件』をつなぐ心性―」、『日本文学』二〇〇四

年九月

高橋世織「南方熊楠と佐藤春夫―大逆事件前後」

『解釈と教材』二〇〇五年八月

河野達也「『自我』の明暗―佐藤春夫の〈詩〉と初

期小説」『国語と国文学』二〇〇四年一月

「田園の憂鬱」「西班牙犬の家」関連

広津和郎「新人佐藤春夫氏（後）」「田園の憂鬱」

の作者」『雄弁』一九一八年十一月

河上徹太郎「倦怠の詩人・佐藤春夫」『新女苑』

一九三八年一二月

山本健吉「佐藤春夫「憂鬱」の尾澤峯雄」『文芸』

一九五五年七月

島田謹二「佐藤春夫「病める薔薇」―推敲過程の

一考察」『明治大正文学研究』一九五五年十月

高田瑞穂「佐藤春夫―大正後半期文学の一標識」

『文学』一九六四年一月

村松定孝「佐藤春夫と風流の伝統―「田園の憂鬱」

の着想をめぐって」『学苑』一九六四年九月

中里弘子「「田園の憂鬱」の成立」『言語と文芸』

一九六六年六月

永尾章曹「佐藤春夫「田園の憂鬱」の文体につい

て」『国文学攷』一九六六年六月

井村君江「佐藤春夫とオスカー・ワイルド―「田

園の憂鬱」を中心として―」『大正文学の比較文

学的研究』明治書院 一九六八年

山敷和男「田園の憂鬱」の文体」『日本近代文学』

一九六九年五月

藤田修一「田園の憂鬱」―十七章の意味―」『日

本文学論究』一九七二年一月

大久保典夫「田園の憂鬱」について」『日本文学』

一九七三年四月

藤田修一「田園の憂鬱」―「彼」の肖像―

一九七三年四月

塚本康彦「田園の憂鬱」と「都会の憂鬱」

一九七五年三月 中央大学紀要

郷原宏「佐藤春夫―文学的亡命者の憂鬱」『詩学』

一九七五年九月

山敷和男「佐藤春夫」『解釈と鑑賞』一九七六年四

月

菊地宏「田園の憂鬱」の妻」『解釈と鑑賞』

一九八〇年三月

中村三代司「田園の憂鬱」への階梯」『国語と国

文学』一九八一年四月

高橋世織「田園の憂鬱」論」『日本近代文学』

一九八二年十月

根岸正純「田園の憂鬱」の文体」『岐阜大学国語

国文学』一九八三年一月

林廣親「田園の憂鬱」『日本の近代小説Ⅰ』東京大

学出版会 一九八六年

湯浅篤志「佐藤春夫「田園の憂鬱」『都会の憂鬱』

『解釈と鑑賞』一九九三年四月

安田孝「『田園の憂鬱』のトボス」東京都立大学

人文学部『人文学報』一九九五年二月

河村政敏「『田園の憂鬱』『解釈と鑑賞』二〇〇二

年三月

鳥居邦朗「佐藤春夫にとつての熊野」『解釈と鑑

賞』二〇〇三年十月

河野達也「佐藤春夫の詩情とハーン」『田園の憂

鬱』と〈詩人〉ハーンのアニミズム」『国文学』

二〇〇四年十月

管野昭正「憂鬱とモダニズム——『田園の憂鬱』考」

『新潮』二〇〇七年四月—六月

「美しい町」関連

河村政敏「『美しい町』試論——憂鬱の精神構造をめ

ぐって——」『日本近代文学』一九六五年十一月

中村三代司「創作と批評の間——佐藤春夫『美しい

町』の場合——」『近代文学論集4』一九八一年一

月

高橋世織「佐藤春夫『美しい町』について——『倒

景』としての東京」『媒』一九八四年一〇月

山崎行太郎「佐藤春夫論十二 建築への意志」『三

田文学』一九九四年五月

関川夏央「『美しい町』を思う 武者小路実篤の

「新しい村」と大正時代（5）」『文学界』

一九九八年

海老原由香「佐藤春夫『美しい町』論——芸術家E

氏の修行時代——」『東京女子大学学会』一九九九

年

信時哲郎「佐藤春夫『美しい町』論——「かはたれ」

の物語り」『神戸山手短期大学環境文化研究所紀

要』一九九九年

桜井啓一「『美しき町』の夢想家たち―『美しき町』

考―」『文芸と批評』二〇〇〇年五月

櫻井啓一「『美しき町』の夢想家たち―『美しき町』

考」『文藝と批評』二〇〇〇年五月

中島国彦「二科展の出版、春夫の出版―その背後
に隠れているもの」『国文学』二〇〇〇年七月

佐久間保明「夢想の好きな男とは誰か―佐藤春夫

「美しき町」の由来―」『国文学研究』二〇〇一

年十一月 早稲田大学

岡田浩行「〈地上〉にある〈美しい町〉―佐藤春夫
の演技的自己露出」『文芸言語研究』二〇〇六年

筑波大学大学院

南明日香「まちづくりのエクリチュール―佐藤春
夫『美しき町』をめぐる―」『国文学研究』

二〇〇七年三月 早稲田大学

初出一覧

第一章・第二章

二〇一一年九月「日本人ならざる者」の葛藤——大逆事件前後の佐藤春夫『初期社会主義研究』第23号

二〇一二年一月「佐藤春夫と大逆事件」『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース』第51号

第三章

二〇一二年七月「文学による〈革命〉として——佐藤春夫『美しき町』とホイッスラーの芸術観」『欧米言語文化研究Fortuna』第23号

二〇一三年六月「無垢という『アイロニー』——『近代思想』以後の仲間・大石七分」『大杉栄と仲間たち「近代思想」創刊一〇〇年』ぱる出版

第四章

二〇〇七年一月「佐藤春夫『美しき町』に表現された水量の〈異空間〉」『芸術・メディア・コミュニケーション』第4号

二〇〇七年二月「明治四十年前後の新宮——大石誠之助の啓蒙活動を中心に」『藝文攷』第12号

二〇一五年三月「美しい」と彼は言った『大杉栄全集 月報』第一巻、ぱる出版

二〇一五年十月「無名時代の佐藤春夫と大杉栄の周辺」『佐藤春夫読本』勉誠出版

山中千春（やまなか・ちはる）

佐藤春夫と大逆事件

2016 年 5 月 25 日 初版第 1 刷印刷

2016 年 5 月 30 日 初版第 1 刷発行

著 者 山中千春

発行人 森下紀夫

発 行 論 創 社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

印刷・製本／中央精版印刷 装幀／宗利淳一＋田中奈緒子

ISBN978-4-8460-1531-2 ©2016 Yamanaka Tiharu, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。